

インドネシア・カリマンタンの野に生きる ——小農たちの栽培作目の選択——

同志社大学人文科学研究so教授 林 田 秀 樹

さて、ここから私の講演に移っていききたいと思います。私自身は、この講演会で、そしてそれを企画した同志社大学人文科学研究so第8研究で、農業部門の小規模生産者＝「山の民」の担当です。これまで、東南アジア、特にインドネシア、マレーシアでは農園作物部門が農業のなかで占める割合がどんどん大きくなってきました。なぜそうなってきたのかというと、それら2国でパーム油原料のアブラヤシという作物の栽培が盛んに行われるようになり、アブラヤシ栽培のための農園開発も急激に進んで、そうした生産活動にかなりの程度依存した農業が行われるようになってきたことが大きな要因です。農業部門が特定の農産物の生産に大きく依存するという状況は、たとえその農産物が大きな収益をもたらすものであったとしても、あまり健全とはいえません。そのような農業の偏った状態を解消するため、具体的には、何かショックが起こったとき農業部門に従事する人たちの暮らしが極度に悪化するリスクを分散させるためには、他の作物、それなりの収益をもたらす作物をいろいろつくって作目を多様化していく必要がある。また、作目を多様化させることでの付加価値生産額を大きくしていく、あるいは少なくとも特定作物に極度に依存している状態とさほど変わらない付加価値額を生産できるようにす

る必要がある。そのいくつかの例を、インドネシアのカリマンタン島にある西カリマンタン州での調査を基にお話をしていきたいと思います。第2講演では「太平洋のフロンティア世界を生きる」、第3講演では「デジタルで生きる街の民」と題したお話へと続いていきます。

栽培作目の多様化に関して何に注目するか

私の調査フィールドは、先ほども触れたインドネシアの西カリマンタン州というところですが、そこで見聞きした小農たち営農の例から「農産物の栽培作目の選択」という問題について考えていきます。講演タイトルの通り、小農たちが生きていくための選択です。その際、以下の諸点に注目したいと考えています。

第1に、これまで、どれほど当地でアブラヤシの栽培が普及して隆盛を極め、そして近年停滞してきているか、という点です。アブラヤシ栽培へのかなりの依存状態から、もっと多様な農業への道を見出していく、考えていくことが課題ですから、その現在地を確認しておくという作業です。

2つ目は、政府が設けている制度に繋がって、作目を多様化していこうとするケースに現地でお出合いました。どのように制度に繋がっているのか、育てようとしている作目は何かについて、当該のケースをご紹介しますと思います。ただ、この場合は、多様化というより「原点回帰」と呼んだ方がいいかもしれません。

第3は、どんどん栄えていく都市部の市場と繋がっていくこと

で、多様な農業を営んでいくチャンスがあることに注目したいと思います。西カリマンタン州という土地は、日本の国土面積の4割弱に当たる14万7千km²もの面積がありますが、人口は500万人程度で日本の4%ほどしかありません。都市部といっても、70万人程度の州都ポンティアナック市が最大の都市なのですが、それと繋がることにも、農業の多様化の道はあるということについてお話ししたいと思います。

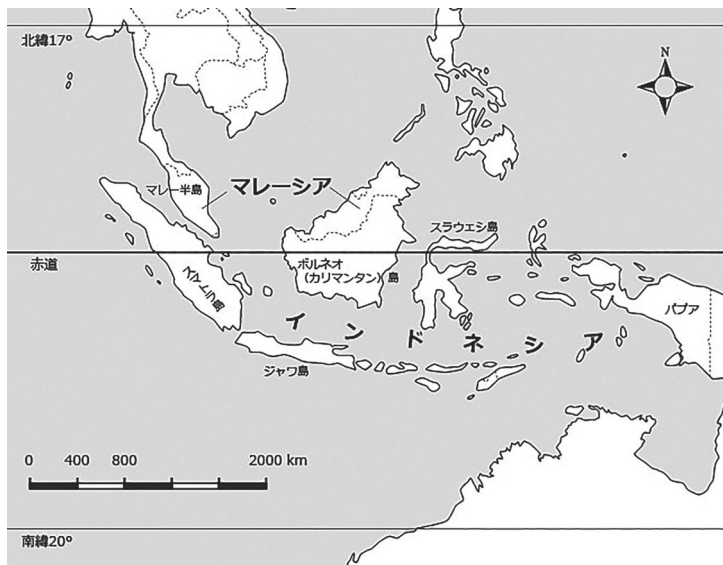
第4に、「サービスと繋がる」という農業のあり方です。小農が栽培して収穫した農作物を、単に市場に向けて販売するだけでなく、それを用いて新たなサービスを生産することで、新しい業態を生み出しているケースをご紹介します。

最後に、多様な農業の営みを「次世代に繋ぐ」ということについて考えたいと思います。栽培する農作物や農法を多様化していくということは、一時的に起きればいいだけの現象ではありません。それを何世代かにわたって継承して行って初めて、その土地に根づいた持続可能な農業になっていく。多様な作目・農法を継承していくための教育が、実践的に行われているケースをご紹介します。

調査地の概要

まず、私の調査地である西カリマンタン州、並びにカリマンタン島の基礎情報をご紹介します。次の地図1をご覧ください。インドネシアを中心とした島嶼部東南アジアとその近隣

地図 1



(出所) 佐久間香子氏 (東北学院大学地域総合学部) 作成。

の地図です。西カリマンタン州は、カリマンタン島 (ボルネオ島) のインドネシア側の西側にあります。

この島の面積は全体として約 74.3 万 km^2 で、日本の総面積の 2 倍をほんの少し切るくらいです。大陸を除く世界の島々のなかで、3 番目の大きさです。インドネシア側だけに絞ってみても約 46.5 万 km^2 と 9 万 m^2 ほど日本の面積を上回ります。人口は面積に比して少なく、インドネシア側で 1700 万人ほどです。さらに西カリマンタン州だけに限ると、面積は約 14.7 万 km^2 で、インドネシアの総国土面積 189.2 万 km^2 のうちの 8%ほどになります。2022 年時点で

の人口と経済規模についてみてみますと、前者は全国合わせて2億7577万人のうちの554万人で約2%、地域内総生産（GRDP）＝地域のGDPも、約256兆ルピアで国全体の1京1710兆ルピアの2%弱となります。

西カリマンタン州の農園作物農業

次に、西カリマンタン州で小農たちがどのような農園作物を栽培しているかについて、概観しておきましょう。表1-1をご覧ください。小農たちの栽培作物についての直近のデータです。このなかには、食用作物、あるいは野菜や果物等の園芸作物は含まれていません。

おわかりいただけることと思いますが、現地の小農たちが育てている作物は、結構多様です。私は、これまで行ってきた調査で、アブラヤシがどれだけ当地で栽培されているか、なぜ現在ほどにアブラヤシの生産が盛んになってきたかを中心に調査してきました。確かに、アブラヤシは現地の農園作物のなかではたいへん多くの小農によって栽培されている作物です。また、農園企業によっても栽培されていますので、なおさら農業全体に占めるプレゼンスは高くなります。しかし、小農が栽培している農園作物のなかでは、「ほとんどそれだけしか生産されていない」といえるくらいの存在ではないことがわかります。栽培面積では、農園作物栽培面積の5割に達していません。ただ、この表からは、ゴム農園を所有している小農も多いし栽培面積もたいへん広いという

表 1-1 西カリマンタン州の小農による農園作物栽培（2021 年）

	農家数（世帯）	面積（ha）
ゴム	301,620	586,081
アブラヤシ	174,377	534,767
ココヤシ	68,738	94,442
胡椒	13,203	29,682
カカオ	9,406	8,135
ピナン	9,140	3,141
キャンドルナッツ	1,203	1,704
サゴヤシ	2,644	1,676
丁子	960	866
サトウヤシ	2,246	566
サトウキビ	1,235	327
木綿（きわた）	465	160
ナツメグ	128	82

（出所）西カリマンタン州農園・畜産局，HP，<https://disbunnak.kalbarprov.go.id/>（閲覧日：2023 年 7 月 22 日）より林田作成。

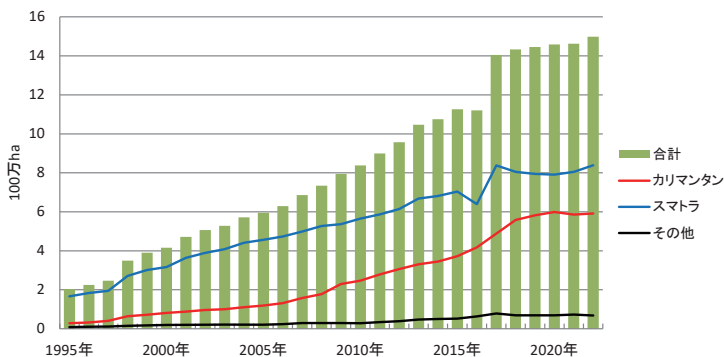
ことが読取れますが、最近特にゴムの価格が低下していることもあって、農園はあっても稼働していない、ゴムの樹液の採取が行われていない農園も多いと思います。実際、現地ではそうした話をよく聞きます。ゴムに関しては、その点を少し割引いてみる必要はあるのですが、アブラヤシによって他の作目の栽培が駆逐されてしまった、まったく途絶えてしまったというわけではないということです。

インドネシア・カリマンタンでの アブラヤシ栽培の普及・隆盛・停滞

さて、1980年前後から2015年頃にかけては、インドネシア全国でアブラヤシ農園面積が急激に拡大しアブラヤシ栽培が盛んに行われるようになってきました。現在、西カリマンタン州ではアブラヤシ以外の作目も多様に栽培されているとはいえ、この間、小農の作目選択もアブラヤシに偏重してきました。ここではまず、この間のアブラヤシ農園面積の動向を追ってみましょう。

この図は、インドネシア全体で、そして地域をスマトラ島部、カリマンタン島部、及びその他地域に分けて、アブラヤシ農園面

図 1-1 インドネシアの地域別アブラヤシ農園面積



(出所) インドネシア農業省農園総局, Statistik Perkebunan Indonesia, various issues.
より林田作成。

積がどのように変化してきたかを示したものです。インドネシア全体では、農園面積が2015年まで急激に拡大してきたことがわかります。1995年の約200万haから20年間で5倍以上増大して2015年には1100万haに達しています。しかし、翌年にかけてほんのわずかですが減少している。この2015年には、アブラヤシ農園が大規模に造成されているスマトラ島やカリマンタン島の泥炭地で大規模な火災が発生しています。その影響でアブラヤシ農園の面積が減少したのかもしれませんが、詳しいことは精査する必要があると思います。それでその後、2017年に急増した後の5年間、微増・ほぼ横這いの状態が続いています。

こうした全体の傾向は、地域別で最大面積のアブラヤシ農園をもつスマトラ島部やカリマンタン島部にも共通しています。後者の農園面積は、直近の2022年でちょうど600万haほどで、比率も上昇してきている。1995年にはインドネシア全体の14%ほどでしかなかったものが直近では約40%にまで上昇し、オランダによる植民地統治期以来農園作物栽培の先進地であったスマトラ島部の50%強に迫るプレゼンスをもつに至っています。

また、州別のデータをみると、トップ5にリアウや北スマトラといったスマトラ島の州に並んで、カリマンタン島の諸州が3つもランクインしています。西カリマンタン州のアブラヤシ農園面積も上位にあって、全国で3位の位置にあります。この西カリマンタン州の農園面積160万haは、日本の都道府県のなかで北海道に次いで広い岩手県の面積を上回ります。西カリマンタン州1州で、岩手県がすっぽり収まるくらいのアブラヤシ農園があ

表 1-2 インドネシアの州別アブラヤシ農園面積 上位 5 位

州 名	アブラヤシ農園面積 (ha)
リアウ	2,858,173
中カリマンタン	1,835,095
西カリマンタン	1,644,610
北スマトラ	1,507,457
東カリマンタン	1,247,689

(出所) インドネシア中央統計庁, *Statistik Indonesia 2023*. より林田作成。

るということです。

作目多様化のあり方①：制度と繋がる

以上のように、1990年代後半以降、カリマンタン全体でも西カリマンタン州に限ってもアブラヤシ農園が急激な拡大を遂げてきたのですが、その前にみた通り、ほかの作目の栽培が行われなくなったかといえば、そうではない。他作目の栽培の伝統も、絶えずに残っています。そうしたなかで、現在、西カリマンタン州を始めインドネシアの小農たちは、これまで大きくアブラヤシが比重を高めてきた農地利用＝栽培作目に関して、その選択をやり直す局面に差し掛かっています。このままアブラヤシに依存した農業を続けることは、先ほどもお話ししたようにリスクを伴うからです。それでは、作目を多様化させる方法にはどのようなものがあるのか。そのうちの1つは、今ある制度を利用する、制度と繋

がるという方法です。まず、そのことについてお話ししましょう。

ところで、アブラヤシ農園は今、物理的な意味でも曲がり角に差し掛かっています。どういうことかといえば、農園が段々古くなってきているということです。1980～1990年代に植えられたアブラヤシの木は、樹齢が高くなるにつれて収量が落ちてきます。そうになると、農園に植栽されているアブラヤシの木をすべて植替えてやる必要が出てくる。政府は今、アブラヤシ農園基金庁という財務省の外郭を通じて、そうした植替え（再植）のための助成金を出して、蓄えのない小農たちを支援するというプログラム（Program PSR (Peremajaan Sawit Rakyat)）を実施しています。それを利用して農園の再植を進めている小農のお話です。

3年ほど前の話ですが、ある日、普段からフォローしている西カリマンタン州の小農の方の Facebook の記事が更新されました。更地にされた農地らしき土地に立つ2人の男が写った写真がアップされていました。彼らの足元には、等間隔に伐採後の木株が並んでいます。その写真にどのようなコメントが添えられていたかというと、「私たちは畑をやっている農民だ。犯罪者ではない。更地になったアブラヤシ農園に稲を植えようとしているんだ」という衝撃的なものでした。その土地は、元はアブラヤシ農園に使われていたその人の所有地なのですが、造成後25年以上経過したということで、先ほどご紹介した政府の小農支援再植プログラムを利用して更地にし、そこに稲を植えようとしているということです。政府の補助金はアブラヤシ農園を再植するために出されたお金ですから、更地になった段階で他の作目に転換するとなると

補助金の流用になって捕まってしまいます。「よくこんな危ないことをやっているな」と思ったのですが、コロナ禍での出入国規制が緩和されて、昨年、久しぶりに当の小農の方に会ってきました。「よくあんなことをやったな」と話を聞きましたら「いや、違うんだ。アブラヤシの苗は植えるよ。しかし、その苗の丈が高くなって日光を遮るようになるまで、その下地に稲を植える、それだけの話だ。ちゃんと助成金はその目的のために使っている」と説明してくれました。再植のための補助金制度を利用して、農地を一時的に他の目的に使うということなのだそうです。アブラヤシの木は、植栽後4年経たないと実が生りません。したがってその間、何も収益をもたらしてくれません。そういうこともあって、日が落ちる下地で稲をつくるという話でした。

このエピソードで紹介した方だけではなく、アブラヤシ農園を所有している小農のなかには、古くなったアブラヤシ農園の木を植替えるとき、農園の一部または全部を他作目のために使いたいと考えている人は少なくないのではないかと思います。複雑な事情がありますので大胆にはいえませんが、世界市場でパーム油がだぶついてきて過剰生産にならないためにも、小農の栽培作目をアブラヤシ以外の作目に転換していくことも大事だと思います。政府としては、パーム油市場を瓦解させないためにそうした作目転換を進めていく手もあるのではないかと思います。

作目多様化のあり方②：市場に繋がる

次に、私が最近訪れたある農村の例をご紹介しますと思います。ここに注目したのはなぜかといいますと、こんなところがあったのかと思わせてくれる、一見して熱帯の楽園を思わせる風景に圧倒されたからです。これまで西カリマンタン州で調査を進めてきて、現地の研究協力者の方に連れて行ってもらったところの多くは、アブラヤシ農園が広大に広がっている地域でした。行くところ行くところ、アブラヤシ農園が何千 ha と広がっている。それぞれの農園の設立経緯や操業状況、労働者の雇用状況、小農との関係、そして現下の課題等について農園関係者から説明を聞かせていただいて、たいへん勉強させていただいていますが、自分の目で見える風景は単調で殺風景です。しかし、その最近訪れた村は、一見して本当にいろいろな作目が植えられていることがわかりました。村の風景というか表情が豊かなんですね。

昨年の8～9月に初めて訪れたときは、表通りからだけではアブラヤシの木は一本もないように思われました。それで今年の3月に行ってみると、アブラヤシの木が植えられているのを発見したのですが、探して回らないと見つからないくらいごくわずかでした。村には何本かの道路が南北にほぼ等間隔に走っているのですが、それに面して各農家が敷地を接している。そして道路に面した側に屋敷を立て、その奥に各戸の農園、農地を所有・経営しています。道路と並行して屋敷地との間に水路が切っており、その水辺にバナナ、ココヤシ、サトウキビ等様々な作物が植えら

れている。そこから離れた区画には、水田もありました。それを見るだけで、心癒されます。子どもたちは、その水路にカヌーを浮かべて遊んでいる。これらを含め、一体どれくらいの作目がこの村でつくられているのか現地協力者に聞いて調べたところ、果物、野菜等の園芸作物を合わせておよそ40種類はあるとのことでした。

その村でなぜ多様な農業が営めるのか考えてみますと、ポンティアナック市という州都に近いんですね。同市の人口はおよそ66万人、この村があるクブ・ラヤ県にもほぼ同じ規模の人口があります。ポンティアック市から村までの距離は、20kmほどです。車で行けば30分もかかりません。そういう比較的大きな都市、すなわち大きな市場の近くでは、園芸作物等生鮮食料品の販売が可能になりますから、多様な農業を営む余地が出てくるのです。

近隣の都市部だけが市場ではないという作目も、いくつかあります。例えば、スイカやマンゴーは村ではほとんどつくられていない。スイカは、西カリマンタン州ではシンタン県という東の方の地域からポンティアナック方面に販売されてくるものが多いそうです。そちらの方が、スイカづくりでは歴史がある。おそらくですが、土質が合うなどの条件が揃っているのでしょうね。マンゴーは、カリマンタン州では、ほとんどつくられていないそうで、ジャワから入ってくるものが多いそうです。調べてみると、インドネシア全体でマンゴーの70%はジャワ島でつくられているといわれています。少しくらい消費地まで距離があっても、これらの作物は問題がないということです。

このほかにも、ピナンという作物があります。嗜好品ですが、これは国内では今はあまり消費されず、大半が愛好者の多いインドやパキスタンに輸出されていくとのこと。天日干しで乾燥させて、長期の輸送に耐える形態で運ばれるものですから問題はない。

この村のほかにも、ムンパワー県というところで、アブラヤシを含む多様な作物を栽培されている農園 2ヶ所を現在調査中です。いずれも 25ha ほどの広さの農園なのですが、そこを 4 年ほど前に京都大学の渡辺一生さんという方にドローンで空撮してもらいました。その写真を見ると、まるでパッチワークのようにいろいろな作物が植えられていることがわかります。アブラヤシも植えているが、他の作物もたくさん植えている。また、ヤギや牛を育てたり、淡水魚の養殖をしたりして、複合的な農業をやっておられます。余ったバナナを家畜の餌にしたり、淡水魚の糞を乾燥させて農作物の肥料にしたりと、循環型の農業でもあります。これらの農園があるムンパワー県も、ポンティアック市からそう離れていません。2～3 時間あればアクセスできます。また、シンカワン市という 20 数万の人口をもつ都市にも近い。距離は、ポンティアック市からの距離とさほど変わりません。

こうしたことから、何がいえるか。西カリマンタン州には、先にもお話したように 500 万を超える人口があります。しかし、面積が広いので、どこでも大都市の消費市場に近い都市近郊農業のような農業は営めないかもしれない。それでも、市場の組織・デザインの仕事によっては、ある程度の規模の人口を組織した市場

に育てていけるのではないか。生産地から市場への距離の問題からある程度自由になって、多様な作物を栽培していくことは可能なのではないかということです。アブラヤシを原料として生産されるパーム油は、世界市場にストレートに太いつながりをつくっていった製品でした。それと比べると、まさに対極的な市場の「つくり方」なのですが、今そのように足元に向ける目線が求められているように思います。現在調査している農村、農園の例から、そうした試みにとって有益な知見が得られないかと考えています。

作目多様化のあり方③：サービスに繋がる

さて、次は農産物そのものを生産・販売する農業が、他の部門の産業と繋がることで、作目を多様化していけないかということについて考えていきたいと思います。「農業の6次産業化」といったことが日本でもいわれていますが、それに類似のケースかもしれません。つまり、農業という1次産業とそれを加工する第2次産業、そして外食産業等それをサービスとともに提供する第3次産業を繋げるという試みについてのお話です。

先ほどお話したクブ・ラヤ県の村には、いくつかのカフェがあるようです。私が昨年研究協力者の方と一緒に訪れたのは、そのうちの1つですが、新鮮でおしゃれなフルーツや、薫り高いコーヒーを出してくれる。どちらも美味しくて、店の雰囲気もくつろげるんですね。子どもたちの遊び場まであって、遊具が置いてあ

写真 1-1 Natural Café D'Bemban



る。これまで詳しくは聞いていませんが、それらのカフェの多くもおそらく現地の農家によって営まれているものでしょう。そうしたカフェがあることで、現地の農業は「サービスと繋がる農業」の1つとなります。

これも先ほどご紹介した、多様な農業を営んでいるムンパワー県の農家の例ですが、最近、近くの海岸で新しい港湾を建設する工事が始まり、そこからポンティアナック市へと延びる道路の建設も始まったのだそうです。まだ全面開通には至っていないようですが、完成すれば市の中心部へ交通の便が格段に良くなることが予想される。農園所有者の方は、自分の農園の一部について用

地買収にも応じ、そこに道路を通す工事にも同意して港湾とその周辺インフラの建設に協力されています。道路で都市部と繋がるだけでなく、海側からも県外とのアクセスが直接改善されることになる。そこで、その農家の方が思いついたのは、「観光農業の村」の構想なのだそうです。自分の農園だけでやろうとしているのか、近隣の農家を巻き込んでやるつもりなのかはわかりませんが、いずれにしても楽しみな構想です。今後、このようにサービス産業と繋がって農作物は栽培しているが、最終的に生産しているのはサービスだという例も出てくるのではないかと思います。日本にも、いろんなパターンがあるようですが、農業体験を売りにする「〇〇ファーム」、「△△の里」といったレジャー型農園があるように、現地でもそうした業態が広がりを見せれば、農産物の作目多様化ということを超えた農業が現れる時代が来るかもしれません。ただ、これも、インドネシアで人々の多くが農業から遠い暮らしをすることになってから盛んになる業態という意味では、少し複雑な思いもします。

作目多様化のあり方④：次世代に繋ぐ

これまで、インドネシアでアブラヤシ以外の農産物の作目を多様化していくためにはどのような考え方がポイントになるかについてお話してきました。アブラヤシがスマトラやカリマンタン、特に西カリマンタンにおいて主要な栽培作物であるという事態を根本から劇的に変えていくことが難しいのだとしても、依存の度

合いを少しでも緩めることができれば、それは現地の農業にとって大切な貢献になると思います。ここで注意したいのが、ことはそう簡単ではなく、短期間で簡単に成果が出る、あるいは決着がつく問題ではないという点です。それは、何世代かにわたって継続的に取組む必要のあることかもしれません。そうだとすれば何が大事になるか。いうまでもないかもしれませんが、教育、技術や考えの伝承にほかなりません。最後に、これに関連したお話を紹介させていただきたいと思います。

先ほど、西カリマンタン州ムンパワー県で多様な作目を栽培している農園が2ヶ所あって、現在調査中だというお話をしました。そのうち、「観光農業の村」を構想しているとして紹介した方の農園では、高校生の若者たちを2～3週間ほど宿舎に受入れて様々な農法の研修を授けていたそうです。彼らの研修費は、基本的に篤志家や企業から寄付を募って賄っているとのことでした。農園内を通る道路の建設が行われている今は、宿舎は建設作業員の方に貸出されているので日帰りというか通いの研修しかできていないという話でしたが、研修自体は現在でも続けられています。制度としてのお仕着せの「教育」ではなく、地元の農業をもっと豊かな状態にして「次の世代に繋いでいこう」という寺子屋のような試みです。

また、もう1つのムンパワー県の農園の話ですが、その農園主は、自分の農園の働き手として常時何人かの若い人たちを雇用しているのだそうですが、それらの若者たち、いわば「弟子」たちに、農園経営者としてだけでなく「師匠」としても接し、いろ

んな農法・技術を伝授しているとのことでした。すでに20人以上のお弟子さんたちが独立して、自分の農園を経営されているそうです。

こうした営みも、大切にされていったらいいと思います。そうしてこそ、場当たりの間に合わせの対処ではなく、地に足のついた取組みが続いていくことになる。これまでお話したような例が他にもたくさんあるかもしれません。そうした例を調査し、紹介していきながら、これからのインドネシアの新しい農業をつくっていくモデルを組立てていければと思っています。私の講演は、これで終わらせていただきたいと思います。ご清聴いただき、どうもありがとうございました。